

## 新・21世紀への道 <その1>

### はじめに

かつて AAINews では、「自然と人間との共生～21 世紀への道」(No.19～24)、「幸せの青い鳥はどこに～あなたの欲しかったものは何ですか？」(No.31～36)と題して、地球環境問題や「豊かさ」や「生き方」等を主要テーマとした2つのシリーズを連載した。

1998～99 年に掲載した「自然と人間との共生」では、「21 世紀に向けての最大の課題の一つは『環境問題』である」として、自然と人間との共生をめざす国内外の事例を取り上げ、文献資料だけでなく、実際に取材あるいは調査に出かけ、我々が考えること、感じたことを記事にした。そして、「途上国援助の現場に身を置く人間として…今後とも、『自然と人間の共生』という考え方を念頭に置いて、国内における共生を目指した様々な活動や、途上国における持続的な開発に取り組んでいきたい」と結んだ。

また 2000～01 年の『幸せの青い鳥はどこに』では、「豊かさ」や「生き方」に着目してシリーズを展開し、「有限の資源と無限の欲望の中で、グローバル化は本当に機能するのか？グローバル化は強者と弱者の格差拡大や環境破壊につながるだけではないのか…」 「人類の果てしなき物質追求と自然の回復能力を遙かに越えた開発をこのまま続ければ、その行き着く先はある程度予想できよう。こうした中で、我々は次世代に対してどのような教育を行い、どのようなシステムを構築して行くべきかを本気で考える時が来ているのではないだろうか」「日本における現在の『閉塞感』は将来に夢が持てないことに関係しているし、その対極にあるものが、希望とか充実感、達成感といったものであろう」と述べた。

これらは 20 年程前「京都議定書」が採択された頃に取り上げたテーマであり、当時すでにグローバル化は進み、地球温暖化が問題となってい

た。一方で、我々が従事する国際協力は、ODA 事業であれ NGO であれ、グローバル化の潮流のなかで少なからず影響を受けてきた活動とみることができる。グローバル化の進展を前提に、国家間の経済・文化交流が活発化し、国際社会の相互依存性が強まってきたのは事実であろう。先進国の責務として、途上国に対して、資金協力や技術協力の諸事業が実施されている。

では、このようにグローバル化が進行する世界のなかで、国際協力を従事する我々は、どのように生き、行動し、進んでいくべきなのであるのか？それを議論したものが前述の2つのシリーズである。そして 20 年経ち、あれから我々は何に取り組んできたのか？これから何をすべきなのか？いまここで一度立ち止まって考えてみようというのが本シリーズの趣旨である

20 年前と比べて、世界が抱える課題に対する解決への道のりもあまり進んでいないように思われるし、問題はより深刻化しているようにも見える。一方で、地域で行動し、世界に発信していくグローバルという活動が生まれたり、農村回帰の潮流とともに地域や里山が見直されたり、持続的な開発を小学校でも教えるなど、20 年前にはなかった動きが起きているのも事実である。

本シリーズでは、グローバリゼーションや資本主義が課題を抱えている中で、それらに対してこれからの地域づくりのあり方や、持続可能な社会や暮らしについて、我々国際耕種の身近にある事例を取り上げながら、今後の国際耕種の活動のあり方とともに考えてみたい。



マングローブの植林を通じた環境教育活動 (2013 年オマーン国にて)

\*上述のシリーズは AAI の Web サイトからご覧になれます。  
<https://www.koushu.co.jp/aainews/>